

『土左日記』における「なほ」の役割

高 田 千 歌

はじめに

中古散文学史において、『竹取物語』が「物語の祖」と称されるのであれば、『土左日記』もまた「日記文学の祖」と称される作品であろう。『土左日記』は、紀貫之に擬せられる「ある人」一行の土佐から京までの五十五日間にも及ぶ舟旅を記した作品であり、それまでの男性貴族の漢文日記とは異なり、そこには多くの諧謔表現や和歌批評などある意味物語的な要素も多分に含まれており、読み手を意識して記された、日記文学という新しいジャンルを生み出した作品と言える。

京までの航路を行く貫之ら一行にとって、最大の関心事は舟の進行であったであろうが、五十五日間のうちおよそ半数は天候に恵まれず停泊を余儀なくされたという記事が続く。そして作中に二〇例出てくる「なほ」の語はその殆どがこの停泊期間中に使用されるのである。また、停泊期間以外では「亡児追慕」の場面や、惟喬親王、業平懐古の場面にも見られる。平安時代においてこの

「なほ」は決して特異な語ではないため、今まで見過ごされてきたが、その使用されている場面を見ると、この『土左日記』においては充分注目に値する語であると考えられる。本稿では、『土左日記』に見られる「なほ」が、作品の根底にある「望郷の念」と「亡児追慕」とにどのように関わり、また作中どのような役割を果たしているのか、そして「なほ」に注目することでこの作品はどのように読めるのか、という事を考察したい。

一 停泊期間中の「なほ」

『土左日記』における「なほ」を考える上で、まず目に入るのが停泊期間中に使用される「なほ」である。

五日。風波やまねば、^{〔なほ〕}同じところにあり。(二二頁)

〈一月五日条〉のように、悪天候によって「なほ」同じ場所に停泊する、という記述はこの他〈二月一日条〉〈二月二日条〉、〈一月十五日条〉、〈一月十六日条〉、〈一月十八日条〉に指摘出来る。厳密に〈一月一日条〉〈二月二日条〉に関しては、具体的に天候

によって舟が出せないという記述はないが、(一月三日条)の「もし、風波の、しばしと惜しむ心やあらむ。」や(一月四日条)の「風吹けば、え出で立たず。」という記述からも分かるように、悪天候により出航しなかつたと判断できよう。

次に、天候とは関係なく、停泊する際の使用例として、

・ 二十六日。なほ守の館にて饗宴しのりして、郎等までに物かづけたり。(一六頁)

・ 八日。さほることありて、なほ同じところなり。(二四頁)

・ 四日。楫取、「今日、風、雲の気色はなほだ悪し」といひて船出ださずなりぬ。しかれども、ひねもずに波風立たず。

この楫取は、日もえはからぬかたなりけり。(中略)

なほ、同じところに日を經ることを嘆きて、…

(四三頁～四四頁)

以上の三例が挙げられる。まず、(十二月二十六日条)は、前日の新国司の館での送別の場面に続き、後任の国司との交流の場面であるため、悪天候による停泊の場面とは多少意味合いが異なるとも考えられるが、同じ場所に滞在する際の「なほ」であることには変わりない。(一月八日条)に関しては、大湊停泊期間中の使用例であるが、この「さほること」の内容に関しては諸説あるため、一概に悪天候によるものとも考えられない。本稿では「さほること」の内容には深入りせず、具体的な原因は不明であるが、停泊期間中の使用であることのみを確認しておきたい。(二月四

日条)の和泉の灘の例は、楫取が天候を予測したがそれが外れてしまつて結局舟を出さなかつたために停泊した場面のものである。

また、海上における停泊期間以外にも「なほ」の使用は見られる。

・ 八日。なほ、川上りになづみて、鳥飼の御牧といふほとりに泊まる。(四九頁)

・ 十三日。なほ、山崎に。(五三頁)

この二例に関しては、他の停泊期間と異なり、海上ではなく川上りの場面での使用である。この場面の「なほ」も、京を目の前にしてもまだ舟の進行はままならないという焦燥感を示していると解釈でき、停泊期間中の使用例と繋がると考えられよう。この淀川廻行の場面設定に関しては、四節で後述したい。

最後に、停泊期間の使用例と直接的には繋がらないが、(二月五日条)の例についても取り上げたい。

五日。今日、からくして、和泉の灘より小津の泊を追ふ。

松原、目もはるばるなり。これかれ、苦しければ、よめる歌、行けど、なほ行きやられぬは妹が續む小津の浦なる岸の
松原 (四五頁)

貫之の一行は(一月二十二日条)から(一月三十日条)まで海賊に怯えながらも、舟の速やかな進行を祈願し、やつとの悪いで海賊に怯える必要のない和泉の灘まで辿り着いた。しかし、やつとこれで京へと帰れると思つた折、(二月一日条)から(二月三

「日条」までの悪天候、加えて二月四日条における楢取の判断ミスによつて停泊を余儀なくされてしまった。やつとの思いで出立したがその目前には松原がはるかに続いている。この「和泉の灘」は「全注釈」によると大阪湾一帯のことを指す語であるといひ、かなりの広域であると想像される。それが二月五日条「冒頭の「からくして」の表現に繋がったのであろう。海賊の恐怖に怯えなければならなかつた長途の航海を乗り越え、悪天候による停泊も終え、やつとの思いで和泉の灘を出立すると目の前にははるかに松原が広がっているのである。この二月五日条の和歌に使用される「なほ」には、こうした不安定な舟旅の永続性を表すかのような働きがあると考えられる。

二月八日条や二月十三日条の川上りの場面の例や、二月五日条の和歌に使用される「なほ」は、純然たる停泊期間中の使用例とは異なるが、舟の進行に対する同種の焦燥感や望郷の念へと繋がるものではなからうか。このように見ていくと、「土左日記」では大湊や室津など長期間舟が停泊を余儀なくされる場面や、舟の進行がままならない場面においては「なほ」という語が意識的に選ばれていると考えられるのである。舟の進行が遅れることは、つまりは帰京が遅れることへ繋がる。「なほ」のみならず、舟が停泊を余儀なくされる場面や舟の進行がままならない場面に関しては、例えば二月六日条にある「昨日のごとし」という表現が、二月二十九日からの停泊によつて大湊に綯

られた時間の堆積を感じさせる、という指摘もある。

勅撰集撰者の紀貫之であるが、官人としての彼は決して恵まれていなかったという指摘は早くよりある。村瀬敏夫氏によると、卑官であった貫之にとつて『古今集』撰者に選ばれた事は思つてもみなかつた幸運であり、撰集の余光によつてようやく陽の当たる地位（少内記）についたといふ。そうした貫之の歌人としての地位は、例えば『古今集』一千百首のうちその一割近くが貫之の歌であるという事実からも自ずと知り得ようし、また、『古今集』編纂後、貫之は、名実共に歌界の第一人者として活躍し、その地位は晩年まで揺らがなかつたといふ指摘もある。官人としては不遇といわれた彼であるが、『古今集』の実質的な筆頭撰者となつたことで、歌人としての不動の地位を獲得することが出来たと想像される。そのような歌人貫之の自負の念は、「土左日記」において、「今日、破子持たせて来た人、その名などぞや、今思ひ出でむ。この人、歌よまむと思ふ心ありてなりけり。」（二月七日条）と、田舎歌人が貫之に自慢の和歌を聞いてもらおうとわざわざやって来る場面にもうかがわれる。また、田舎歌人の場面ほど顕著ではないが、二月二十一日条に「このあひだに、使はれむとて、つきて来る童あり。」と、童がついて来る場面がある。この童が舟歌を詠むという点に着目するならば、ここにも貫之の歌人としての地位の反映を見出すことが可能である。

その貫之にとつて、歌人として活躍していた京を離れ土佐に赴

任ずることは、歌壇の中心を離れることであり、歌人としては不利益であったらうと考えられる。当然一刻も早く京へ戻りたいという想いがあつたのではないか。また、土佐に赴任したことは、貫之に流人意識を抱かせたという指摘もある。貫之個人の単純な感慨の表出として「土左日記」を読むことに関しては慎重を期さなければならぬが、「土左日記」というテクストを追う限りでは、都である京へ一刻も早く帰りたいのに、中々進まない舟に対して強い焦燥感を抱いていることが容易に読み取れよう。

作中二〇例ある「なほ」のうち、停泊期間や舟の進行がままならない場面の「なほ」をそれぞれの泊り別でまとめると「表一」のようになる。

【表一】

場所	日付	停泊期間
大津（寺の館）	12/26	一泊（12/25～12/26）
大湊	1/1・1/2・1/5・1/8	一〇泊（12/28～1/8）
室津	1/15・1/16・1/18	一〇泊（1/11～1/20）
和泉の灘	2/4・2/5	四泊（2/1～2/4） <small>（2/1～2/2を）</small>
鳥飼の御牧（淀川）	2/8	一泊（川） 始めて三日目
山崎	2/13	三泊（2/11～2/13） （川上りを始めて八日目）

やはり大湊、室津^①と長期間停泊を余儀なくされる場面には多く使用されている。また和泉の灘や鳥飼、山崎の例は先述した通り純然たる停泊期間中の使用例とは分けて考えられなくてはならないが、和泉の灘の場面では四泊の停泊、鳥飼、山崎に関しては、他に比べ停泊期間自体は短いものの、それぞれ川上りを始めて三日目、八日目と舟の進行はやはり滞っている。このようにこの表からも、停泊期間や舟の進行がままならない場面、つまり京への帰還が遅れる場面には「なほ」の語が選ばれていると考えられるのである。

昨日と変わらず同じ場所に滞在するのであれば、作中他にもあるように「昨日のごとし」「昨日と同じところなり」でよかつたはずである。であるにも関わらず、この「なほ」が多用される訳は、貫之自身がこの舟旅で味わった焦燥感や現実の舟旅の実感が反映されているからではないか。「土左日記」は読み手を想定した上で執筆された作品であろうし、貫之の緻密な計算の元に成っており、虚構と思われる表現は作中散見される。しかしその一方で、自身が味わった一刻も早く京へ帰りたいという心の底から湧き出るような想い、自身の舟旅の実感が停泊期間中に使用される「なほ」に表れているのではないか。

停泊期間中に使用される「なほ」は、そうしたこの作品全体を覆う「望郷の念」のみならず、当時の貫之の一刻も早く京へ、という悲痛な想いの表出を担っていると考えられる。

二二〇二月二十一日条の「なほ」

次に、(二月二十一日条)の童の舟歌に使用される「なほ」を見たい。貫之の一行は、十日間の室津停泊を終え、やっと舟の立を迎えられる。そして、当代一の歌人である貫之に遣つてもらおうとして来たという設定で童の舟歌へと続く。童は室津を過ぎるともう見えなくなつてしまふ故郷「土佐」への想いを、「なほこそ国の方は見やられるわが父母ありと思へばかへらや」と詠う。この舟歌の「なほ」は強意の係助詞「こそ」で強調され、物理的には、室津を過ぎれば土佐は見えなくなつてしまうことから、「土佐」に属する童にこの場面で詠わせたと考えられる。

この童の舟歌に関して深沢徹氏は「かへらや」に注目され、「実のところ」土佐日記は、ミヤコ(未来)へ向かうベクトルと、土佐(過去)へ帰ろうとする逆方向のベクトルとの、その二つの力のせめぎあいの場としての「現在」という時間に、宙吊りにされたテキストなのである。」と指摘し、「かへらや」の言葉は過去に向かう逆方向のベクトルの一つの表れであるという^{二〇}。

確かにこの場面に関しては、土佐へ向かう童の舟歌に対して、京へと向かう貫之ら一行の想いとは対極的であると度々指摘される。本稿でも一節で述べた通り、停泊期間中や舟の進行がままならない時に使用される「なほ」には、一刻も早く京へ帰りたい、という貫之の想いの表出であるとした。しかし、貫之ら一行の都

(未来)への想いと童の土佐(過去)への想いとは対極的なものであると単純に理解出来るのであろうか。

そこで、貫之が土佐赴任中に編纂した『新撰和歌』三の「序」を見たい。

昔延喜之御宇。属二世無為^レ。因三人之有^レ慶。令撰進万葉外古今和歌一千篇^一。更降勅命抽其勝^一矣。伝勅者。執金吾藤原言^一。奉詔者。草莽臣紀貫之。貫之未^レ及抽撰^一。分^レ憂赴任。政務余景。漸以擬定。(中略)

貫之秩罷帰日。将以上献之。槇山晚松愁雲之影已結。湘浜秋竹悲風之声忽幽。(伝)勅納言亦已薨逝。空貯妙辭於箱中^一。独屑落涙于襟上。若貫之逝去。歌亦散逸。(一八八頁)

「延喜之御宇」醍醐天皇の勅命により、「藤原兼輔によりつてその勅命は伝えられ、「抽其勝」つまり「万葉集」「古今集」よりも秀でてゐるものを改めて選び出した、という。しかし、撰を終えて京へ戻り、将に献上しようと思つた折、献上する相手は居らず、一人涙を流す、というのである。

『新撰和歌』の「序」に「藤原言」と表される兼輔と貫之との交流は深い。前掲村瀬氏の論によれば、延喜十年に貫之は少内記に任命され、詔書や勅旨を起草する内記の仕事の性質上天皇の側近である蔵人達とも接触を持ち、当時五位蔵人であつた兼輔ともその時に親交を深め臣従関係となつたとされる。また、藤岡忠美氏の、「兼輔を中心として藤原定方と職業歌人の貫之を加えた

三人でいわば小世界といえるものが構成されていたのではないか、そして、貫之のような職業歌人にとってはその世界が最も大きなものであり、精神的よりどころであった^{一三}、という指摘もある。二人の親交の深さは、「延長八年九月、京極の中納言、諒闇のあひだに母の服にて」の詞書を持つ『貫之集』の贈答歌にも指摘できよう。実際、貫之の土佐赴任中（延長八年九月二十九日）に醍醐天皇が崩御し、同年に兼輔の母も亡くなっている。兼輔は、その二重の悲しみを土佐に居る貫之に詠んで送っているのである^{一四}。しかし、その兼輔も貫之が土佐守の任期を終える一年前に亡くなってしまふ。醍醐天皇、藤原兼輔が京において貫之の庇護者であったことは言うまでも無く、加えて藤原定方、宇多上皇など京におけるパトロンの存在であった人々が貫之の土佐赴任中に次々と亡くなっている。その中でも兼輔の死は貫之にとつては最も重大な出来事だったはずである。

また『新撰和歌』は、家人である貫之の官人としての不遇を見かねた兼輔が立案し、『古今集』撰者である貫之を撰者にと天皇に奏上したのではないか^{一五}とみる向きもある。貫之にとつて兼輔の存在はただ親しく歌を贈答するような間柄だけではなく、京を離れてもお精神的な拠り所であったのであろう。土佐赴任中に編纂した『新撰和歌』の「序」は、当時貫之が置かれていた現実を如実に伝える資料であり、彼にとつて兼輔を初めとする庇護者の人々の死の重みがどれ程重大であったかは、この序文からも

知り得るのである。想像の域を脱しないが、当時貫之が求めてやまなかったのは、物理的時間軸上の「京」への帰還ではなく、自らが土佐へ赴任する以前の「京」つまり、「過去への帰還」と考えられるのではないか。

平安時代に入り、宮廷を中心とした貴族階級が成立した。「貴族たちは新しく「みやこ」という自分たちの世界を作り上げ、それ以外は「人の国」として区別し切り棄て、ほぼ純粹な消費階級としての貴族社会を確立していった^{一六}」という指摘の通り、都人にとつては「京」が中心であり、上位の「京」、下位の「鄙」（＝「京ノ鄙」）という階層意識があったことが想像される。そうした貴族社会において、社会的、文化的にも大きな意味を持つ勅撰和歌集撰者となった貫之もまた、都人意識、上位の「京」に対する下位の「鄙」という階層意識を持っていたであろうし、「京」以外の地である「土佐」は貫之にとつて「人の国」同然であったはずである。一見すれば『土左日記』世界においても「京ノ土佐」という上下関係は変わらない。しかし、『土左日記』表現の細部を追って行くと、『土左日記』における「京ノ土佐」の関係は当時の社会通念上の「京ノ鄙」の関係と必ずしも一致するとは言えないものがある。

十二月二十一日、戌の時に門出した貫之ら一行は、「土佐」の人々の手厚い送別を受ける。その中でも、「十二月二十三日条では、「八木のやすのり」という人を紹介する。「たははしきやうにて、馬

のはなむけしたる。(中略) いまはとて見えざるを、**心ある者**は、恥ぢずになむ来ける。」と、決して重用したわけでもないのに、立派な態度で餞別をした彼を「心ある者」として取り上げる。この場面のみならず、これ以降も人の「心」や「志」に関する事がしばしば話題にされる。何故貫之が人の「心」や「志」を話題にするかは後述するとして、例えば、(一月九日条)では「藤原のときぎね」「橘のすまひら」「長谷部のゆきみひら」と名前を挙げて「この人々ぞ、志ある人」であると強調し、「この人々の深き志はこの海にも劣らざるべし」と、志の深さは海の深さにも及ばないとまで表現される。これは、去っていく自分をわざわざ見送りに来てくれるその土地の人々の行為を貫之が高く評価しているともみべきであり、名を上げてそれらの人々の行為を話題にする事もその行為を強調しているからと考えられる。

こうした見送りの人々に対して、旧宅に到着した(二月十六日条)では、「かくて京へ行くに、鳥坂にて、人、饗応したり。かならずしもあるまじきわざなり。発ちて行きし時よりは、来る時ぞ人とはかくありける。」からも明らかのように、出迎えの人々に対して「饗応」自体してくれなくてもよいことであるのに、という。まして、あれ程までに早く帰りたいと切望した「京」の人々に対してである。加えて、「聞きしよりもまして、いふかひなくぞ、こぼれ破れたる。家にあづけたりつる**人の心**も、荒れたるなりけり。」と、隣人に留守を頼んでおいた旧宅は、言いようの無

い程の荒れようで、隣人の「心」も荒んでしまっている、と嘆く。この作品において、「土佐」を出立する際の見送りの人々に比べ、一刻も早く帰還を願った「京」での出迎えの人々の評価は、かなり低いものになっているのである。

『土左日記』においては、上位であるはずの「京」の人々の行為は決して褒められるものではなく、その心は荒れ果ててしまっており、下位であるはずの「土佐」の人々の行為こそ褒められるべきもの、「心ある者」として評されるのである。つまり、『土左日記』においては上位の「京」に対する下位の「土佐」という階層秩序は絶対的なものではなく、根源から揺らいでいたのである。舟の進行という物理的な時間軸上では、日を追う毎に貫之ら一行は「京」へと近付いている。停泊期間中に見られる「なほ」に注目しても舟の進行に対する強い焦燥感是否定できない。しかし、貫之が一刻も早く帰りたいと願った「京」は土佐に赴任する以前の「京」であった。『土左日記』世界の背景に、当時貫之が置かれていた状況を重ね合わせる時、この旅の終着点である「京」は「未来」ではなく「過去」を表しているのではないか。停泊期間中や舟の進行が滞っている場面に「なほ」を繰り返すことで一刻も早く帰りたいと願った「京」は、もうそこには無いと分かっているながらも一分の願いを込めた「過去の京」ではなかったか。

ここで、(一月二十一日条)の童の舟歌の場面をもう一度想起されたい。『土左日記』において「京／土佐」の上下関係が揺ら

いでいることは先述した。童の歌が物理的には空津を過ぎるともう見えなくなってしまう故郷「土佐」へと向かうものであり、これに対して貫之ら一行の京へと浮き立つ思いは対極に位置するというのが従来の説であるが、これは、上位の「京」に対する下位の「土佐」という社会通念上の対立関係をもとに、「土左日記」の旅を、当時の「京」への帰還であると解することに端を發したのではないか。しかし、「土左日記」における「京」は貫之にわたっての「過去」を象徴するものなのである。童の「土佐」へと向かう想いと貫之ら一行の「京」への想いと、物理的には対極方向へと向かうものであるが、「土左日記」においては、どちらも「過去」へと向かう想いであり、対極ではなく同じ方向へと馳せる想いなのではないか。そうであれば、(一月二十一日巻)における童の舟歌において「なほこぞ」と強調されている点も納得できるのである。

三 「亡児追慕」の場面の「なほ」

「土左日記」におけるもう一つの大きなモチーフである「亡児追慕」の場面は(十二月二十七日巻)に初出する。この場面は、「古今集」綴旅・四二二「北へ行くかりそなくなる」の歌の左注の発想を元に成されており^七、土佐から京までの帰京のモチーフを、亡児追慕の悲しみの情と重ねることで、この作品の根底に流れる悲哀の情をより一層印象付けることとなろう。そして、女兒を亡

くした人に同情し、同船の人々もその悲しさに耐え切れず、代表して「ある人」が「あるものと忘れつつなほなき人をいづらととふぞかなしかりける」の和歌を詠む。

(十二月二十七日巻)の歌に使用される「なほ」を考える上で、「幼女の死」が「作者の卓越した虚構のレトリック」である、という長谷川政春氏の論^八が思い起こされる。何故このような虚構の方法をとったかについて、長谷川氏は、貫之自身の「死」の投影であり、自身の「老身」が対極にある「幼者」に転化されたからであると結論付けられる。この指摘は至極その通りであろう。しかし更に、二節で述べたごとく、貫之が「土左日記」においてしばしば人の「心」の在り方を問題にしていることを鑑みるならば、そこには「不変の自然」に対する「変りやすい人の世、心」を嘆くという想いの反映があつたのではないか。

不変の自然と人の心のうつろいやすさを対比して詠む表現は漢詩にもしばしば表れており、また「古今集」にもこの類の表現は多い^九。当然貫之歌にもこうした対比の表現を用いた和歌は多く^{一〇}、「不変の自然」に対する「変りやすい人の世」を嘆くという想いがこの作品に表れていても不思議ではなからう。それが、「土佐」を出立する際に、見送りの人々の「心」や「志」を取り立てて問題にし、その「心」の深さを海の深さ以上であると評した理由でもあろうし、「京」での出迎えの人々に対する評価の低さや、旧宅を預けていた人の「心」までもが荒んでしまつて

いる、という表現にも表れているのではないか。見送りの人々は、土佐守の任期を終え「土佐」を離ればもう用のない自分の為、わざわざ追いかけてまで別れを惜しんでくれる「心ある者」である。一方で、出迎えの人々は、地方国司の任を終えた自分のおこばれに預かるうとする「心」が透けて見えるかのような存在であり、更に旧宅を荒れ果てさせた隣人は「心」までも荒れ果ててしまっている。これは、前者が貫之の求める「変わらない人の心」、後者が現実の「変わってしまった人の心」の具体例であろうし、「変わらない心」であるからこそ「土佐」の人々は繰り返して、名を挙げてまで評価されるのであろう。

貫之が希求したものは「変わらない人の心」そして、「不変の人の世」であった。そうであるにもかかわらず、現実には貫之が求めたそれとは相反し、変わらないで欲しいと願ったものは悉く失われていった。それは、当時の「京」における貫之の庇護者である人々の死であり、とりわけその中でも、精神的な拠り所であったであろう兼輔の死は、貫之にとって大きな打撃となつたはずである。そうした当時の「京」における庇護者の人々の死を、作中「ある人」の具体的体験として形象化し、その喪失感を背負い危険な舟旅へと向かうという設定でこの作品を始めるために、「幼女の死」という虚構の方法が選択された。それは、(十二月二十七日条)の歌「あるものと忘れつつ忘れなき人をいつらととふぞかなしかりける」に始まり、この日記の最後、「かかろうちに、忘れ悲

しきに堪へず」に、「ひそかに心知れる人」(通説では貫之の妻)と「生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲しさ」の和歌を詠み合い、「忘れ、飽かず」に「見し人の松の千歳に見ましかば遠く悲しき別れせましましや」の和歌を詠む(二月十六日条)へと帰結する。

長く厳しかった五十五日間の舟旅を終えた最後の最後であつてもやはり、思い返されるのは亡くなった女兒のことなのである。この二首の背景に兼輔関係の哀傷歌があることは諸注に指摘されている^{三〇}。ここからも貫之にとって兼輔の死がどれ程重大であつたかが容易に想像出来ようし、自身が土佐赴任中に「変わってしまった世」の嘆きをこれら「亡児追慕」の場面の背景に読み取ることができる。そうした失われたものへの嘆き、「過去」への悲痛な想いの象徴が「亡児」ではなからうか。

しかし、(二月十六日条)において荒れ果てた旧宅を目にした時、貫之は現実へと引き戻されるのである。二節でも述べた通り、現実の「京」は貫之が一刻も早く帰りたいと願った「京」ではない。それは分かっていたことであるが、失われたと分かっているも「なほ」悲しく「なほ」思ひ出されてならない「変わらない人の心、世」を求める貫之の想いを表す一端を担っているのが、「亡児追慕」の場面に使用される「なほ」という語ではないか。

四 〈二月九日条〉の「なほ」

その一方で、「不変の自然」に対する想いは、〈二月九日条〉に顕著に表れる。

淀川を遡る途中で貫之ら一行は、『伊勢物語』八十二段にも引かれる著名な「渚の院」で作品の現在から七〇年程前の惟喬親王と在原業平の親交に思いを馳せる。「千代経たる松にはあれどいにしへの声の寒さは変はらざりけり」の和歌を詠み、惟喬親王の悲運に対して同情し、「千年経たる松」と「風の音」に業平の変らない忠誠心を擬える。そして「君恋ひて世を経る宿の梅の花むかしの香にぞなほにはひける」の和歌へと続く。作品現在では荒廃してしまった「渚の院」であるが、そこに咲いている梅の花の香りは、現在でも変わることなく当時と同じように「なほ」香っていることだ、とやはりここでも循環し、再生する自然を詠んでいるのである。

また、「君恋ひて……」の和歌は、『古今集』春上・四二「人はいさ……」の歌と同様の発想で詠まれていることは明らかであり、この二首に詠まれる「梅の花」は『万葉集』以来古を偲ぶ縁として多くの歌に詠まれている。「渚の院」の場面において、変わらぬ同じ香を放っている「梅の花」を持ち出すことも、惟喬親王と業平の故事を偲ぶ意識へと繋がろう。

〈二月九日条〉は、『土左日記』の中でも旧宅へと到着する（二

月十六日条）へと続く最後の山場であり、ここに「渚の院」の場面を設定し、「不変の自然」、循環再生する自然への想いを具体化させる事には大きな意味があるように思われる。それはやはり「渚の院」が、貫之が求めていた「京」、つまり庇護者である醍醐天皇や兼輔が存命であり、歌人として輝かしい活躍をしていた土佐赴任以前の「京」を表現するに最も適した場であり、「渚の院」に付随する惟喬親王と業平との親交のイメージが、貫之の求めていた理想と合致するからではないか。幾世代も経てきたはずの梅の花は、昔と何ら変わることなく、「なほ」同じ香りで香っているのである。

そしてその想いはこの場面の後、亡児の母の和歌の場面、つまり失われた「過去」を求める場面へと続くことにより、より一層理想と現実の落差、「不変の自然」に対する「変りやすい人の世」の嘆き、という輪郭を濃くするのである。また、この場面に関しては既に木村正中氏の「文脈上は業平と惟喬親王に対するものであるが、その背景には貫之自身の兼輔への真心を重ねている」という指摘がある。惟喬親王と業平との関係は、兼輔と貫之との関係に完全に等しいとはいえないが、心を許しあった両者の交流を、兼輔と自らとの親交とに擬えていると見る事も、当時の貫之の置かれていた状況を踏まえて『土左日記』を読み解くならば、決して強引な理解ではなからう。

『土左日記』の旅は「過去への回帰」であると述べたが、舟が

段々と京へ近づいて行く時、その喜びは貫之が土佐へ赴任する以前の「京」を思い起こさせる「渚の院」の風景を目の当たりにすることによって更に沸きあがり、その「不変の自然」を目にする^二ことにより一層「京」への帰還を実感するのである。循環し、再生する自然、自らが求めていた「京」へと帰ってきたことを思い起こさせる自然が「渚の院」であり、そしてその「渚の院」に付随する惟喬親王と業平との親交のイメージこそ貫之の求めていた「京」なのである。(二月九日条)で詠われる「君忍ひて……」の和歌に使用される「なほ」は、貫之の求める「京」の姿、「変らない人の世」という想いの一方で、変らないものは「自然」のみであるという「不変の自然」に対する想いへと繋がるものである。「変らない自然」への想いは、「渚の院」において具現化される。

この「渚の院」に付随する惟喬親王と業平との親交のイメージの背景に、更に貫之と兼輔との親交を重ねることで、より一層、貫之の求めた「京」への想いが顕著になるはずである。

ここでもう一度川上りの場面に触れておきたい。(二月六日条)で淀川河口に到着した貫之ら一行は(二月十五日条)までの九日間、川上りが続く。その間も舟の進行はままならず一節でも述べたが、(二月八日条)の鳥飼と(二月十三日条)の山崎の場面では、舟の進行に対する焦燥感を表す「なほ」の使用も見られる。「望郷の念」を表す「なほ」については、当時の「京」ではなく、貫之が土佐赴任以前の「京」への想いの表出であることは今まで述

べてきたつもりであるが、この淀川遡行九日間の舟の進行の滞り方は、貫之の理想と反する当時の「京」への帰還への躊躇と捉えられないか^三。この日記の最後(二月十六日条)へと続く最後の山場である(二月九日条)の「渚の院」の場面を過ぎて、舟の速度は上がらない。それどころか、舟の進行は滞り、日々記述は少なくなる一方である。これにはやはり「土佐日記」における「京」と「土佐」の関係の揺らぎが関係しているのではないかと考えてしまうのである。川上りの場面には確かに停泊期間中と同じように「なほ」同じ場所に、という焦燥感が窺える。繰り返すがそれは貫之の理想の「京」、「過去」への帰還に対する焦燥感なのである。その証に、(二月十五日条)で、京から車が到着し、舟を降りて「ある人」の家に移った際、この「ある人」は、「この人の家、喜べるやうにて、饗応したり。この主の、また、饗応のよきを見るに、うたて思ほゆ。」と、地方国司であった自分に対するおこほれに与ろうとする過度な饗応が情けない、と評されている。これは、二節でも指摘した「京」で迎えてくれた人々への評価の低さと繋がるものがあり、こうした点にも社会通念上の「京」と「鄙」との上下関係が「土佐日記」における「京」と「土佐」との関係と必ずしも一致しないことが伺われる。何よりこの日記の最後、(二月十六日条)の「京」へ戻ったことの嬉しさとは相反するがごとき現実の状況への落胆振りこそ、貫之の求めていた「京」が最早現実世界では決定的に失われていることを、

雄弁に物語っているのである。

まとめ

『土左日記』は、紀貫之によって緻密に計算された作品である。貫之のそうした緻密な計算は冒頭の一文から最後の一文まで作品全体に渡って張巡らされており、それがこの作品を「まさに言語によって表現された固有の世界」^四と言わしめる要因の一つでもある。『土左日記』は、決して男性貴族の漢文日記のごとき事実のみを記載するものではない。あくまでも読み手の存在を強く意識しながら、時には虚構を交えつつ創作された作品である。しかし、地方国司として貫之が土佐に赴任した事、貫之自身が「土佐」から「京」までの旅を行った事も事実である。作品世界と貫之の実人生とを直結させることは危険であるが、やはりこの作品が旅の記として在る以上、作者貫之が当時置かれていた現実と関わらせ、注意深く読むべきではないか。

貫之にとつての「土佐」から「京」までの旅は、失われた「過去」を追い求めるものであった。記述の表層をたどる限りでは、舟が「京」へと近付くにつれ、その喜びはいよいよ鮮明になる。しかし、繰り返すがその「京」は、あくまでも貫之が土佐守として土佐に赴任する以前の「京」であった。つまり、貫之が『古今集』の代表歌人として活躍し、彼の庇護者であった人々が存命であった頃の「京」であり、任を終えて帰京したとされる承平五年の「京」

ではないのである。停泊期間中や舟の進行が滞っている場面において「なほ」を繰り返すことで一刻も早く帰還を願ったのは「過去」の「京」である。そしてそれは、「亡思」という形でこの作品に形象化される。「不変の人の世」という理想と、「移り行く人の世」という現実との狭間で、どちらも受け入れることの出来ない貫之の想いが、『土左日記』には表れているのではなからうか。そしてその悲痛な想いは当時の社会通念上の「京」と「土佐」という上下関係を作中で揺るがすほどのものであったと思われるのである。

既に失われていると分かっているながらも尚求めてやまなかった「変わらない人の世、人の心」への想いは、『土左日記』創作の契機となったであろう。しかし、京に帰還した貫之は、承平五年の現実へと引き戻され「過去への回帰」は終にならなかつた。作中に「なほ」を繰り返すことで、揺れ動き続けたその想いは何処にも収束しない。それが最後の一文、「忘れがたく、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。とまれかうまれ、とく破りてむ。」へと繋がったのではなからうか。

【注】

一 本稿では作中二〇例使用される「なほ」のうち、『土左日記』の旅と直接的に関わる副詞例のみを考察の対象とする。よって、名詞例である（一月四日条、旅の進行に直接関わると考えられない（一月十四日条、二月五日条）の楳取の会話文中に使用

される「なほ」は考察の対象としない。

二 以下、本文の引用は『新編日本古典文学全集』(小学館)に拠る。高頁数を漢数字で示した。また必要に応じて本文に傍線、網掛けを施した。

三 荻谷朴氏『土佐日記全注釈』(二五五頁―一五七頁)では、作中全体で、出航しなかった理由を記載している日を選んでその記載方法を詳細に検討し、この「障り」の意味は不明、と提示する。

四 『全注釈』(二九六頁―二九七頁)。

五 『新潮日本古典集成』(新潮社)一七頁・頭注一四。

六 村瀬敏夫氏『紀貫之伝の研究』(昭和五八年 桜楓社)。

七 藤岡忠美氏『二 古今から後撰へ』(平安和歌史論―三代集時代の基調―昭和四一年 桜楓社 所収)(初出『国語国文研究』

第八号 昭和二九年三月)。

八 例えば品川和子氏『土佐日記全注』(講談社学術文庫)や『集成』、『新日本古典文学大系』(岩波書店)の解説などには詳しい。一方で、村瀬敏夫氏『紀貫之伝の研究』の貫之自身が土佐赴任を自ら望んだものである、という見解もある。

九 「表一」における日付が表すものはそれぞれの日の記事(例えば『表一』(二)なら(十二月二十六日条)である)。

一〇 室津停泊期間中の十泊については(十一月十七日条)の「船返る」の表現を巡り、①室津に引き返した。②御崎の泊り(白浜)へ戻った。③津呂へと戻った。とする説があるが、出港した室津に戻ったと解釈することがほぼ通説化していると考えられるため、通説に従う。よって、十日間移動せず室津に停泊し続けた訳ではないが、結果的に室津に停泊したために十泊とする。

一 深沢徹氏「さすらいの旅の果て―『土佐日記』に見る音聲中心主義と、その行方」(『自己言及テキストの系譜学―平安文学をめぐる七つの断章―』平成一四年 森話社 所収)

二 本文の引用は、菊地靖彦・校注『校注 新撰和歌集』(『古今集』以後における貫之』昭和五五年 桜楓社 所収)に拠る。頁数を漢数字で示した。また、必要に応じて囲み線を施している。

一三 注七に同じ。

一四 この兼輔と貫之の贈答歌について、工藤重矩氏『平安朝律令社会の文学』(平成五年 ベリカん社)の、『兼輔集』にある詞書の相違から、実際に兼輔が「土佐」に送ったものではない、という異説もあるが、この贈答歌に関しては「貫之集」にある詞書の通りに解釈することが通説であると思われるため、本稿では通説に従いたい。

一五 注六に同じ。

一六 増田繁夫氏『古今集と世族文化』(古今和歌集研究集成 第一巻)平成一六年 風間書房 所収)。

一七 菊地靖彦氏『土佐日記論―古今集巻九藤原部との関係において―』(『文芸研究』(昭和四三年六月))。

一八 長谷川政春氏『紀貫之論』(昭和五九年 有精堂)「土佐日記へのアプローチ」(初出『古典批評』第五号 昭和四四年)。

一九 片桐洋一氏『古今和歌集全評釈(上)』(平成十年 講談社)の四七七頁では、「桜の花の盛りに、久しく訪はざりける人の来たりける時に、よみける」の詞書をもつ巻第一・春歌上・六二の読入しらず歌と、六三の業平歌との贈答などはその代表であると指摘する。

- 二〇 代表例としては「古今集」春上・四二の「人はいさ心も知らず
ふるさは花ぞ昔の香にほひける」が挙げられよう。
- 二一 例えは「新編金集」五六頁頭注二及び頭注三。
- 二二 木村正中氏「紀貫之小伝」伝記資料としての「貫之集」(集成)
解説。
- 二三 「金注釈」(三八八頁)には、「二月十一日参」にある「定むること」
が長引いたのではないか、という指摘がある。
- 二四 長谷川政春氏「土佐日記、その表現世界」(「新大系」解説)。
(たかた ちか 岡山大学大学院社会文化科学研究科)

研究室受贈図書雑誌目録Ⅲ

- 大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告(大阪樟蔭女子大学日
本語研究センター) 十五
- 大阪大谷国文(大阪大谷大学日本語日本文学会) 三八
- 大阪大学 日本学報(大阪大学大学院文学研究科日本語研究室)
二七
- 大妻女子大学紀要——文系——(大妻女子大学) 四〇
- 大妻国文(大妻女子大学国文学会) 三九
- 岡山大学 国語研究(岡山大学教育学部国語研究会) 二二
- 海外の幼学研究(幼学の会) 一、二、三、四
- 香川大学国文研究(香川大学国文学会) 三二

- 学習院大学人文科学研究所報(学習院大学人文科学研究所) 二〇
〇七年度版
- 学術研究——国語・国文学編——早稲田大学教育学部)五六
- 香椎潤(福岡女子大学国文学会) 五三
- 活水論文集(現代日本文化学科編) 五一
- 金沢大学国語国文(金沢大学国語国文学会) 三三
- 岐阜大学 国語国文学(岐阜大学教育学部国語教育講座) 三四
- 汲古(古典研究会) 五三
- 九州大学言語学論集(九州大学大学院人文科学研究員言語学研究
室編) 二九
- 紀要(中央大学文学部) 一〇一、一〇二
- 紀要(名古屋女子大学) 五四
- 京都語文(仏教大学国語国文学会) 十五
- 京都府立大学学術報告 人文・社会(京都府立大学) 五九
- 金城日本語日本文化(金城学院大学日本語日本文化学会) 八四
- 近代文学研究(日本文学協会近代部会) 二五
- 群馬県立女子大学 国文学研究(群馬県立女子大学国語国文学
会) 二八
- 研究所年報(大妻女子大学 草稿・テキスト研究所) 一
- 研究年報(大阪府立大学上方文化研究センター) 九
- 言語科学論集(東北大学大学院文学研究科言語科学専攻) 十二
- 言語学論叢(筑波大学一般・応用言語学研究室) 二六